

## V 排泄に関わる部位に作用する薬

### 1 痔の薬

#### 1) 痔の発症と対処、痔疾用薬の働き

痔は、肛門付近の血管が鬱血し、肛門に負担がかかることによって生じる肛門の病気の総称で、その主な病態としては、痔核、裂肛、痔瘻がある。

痔核は、肛門に存在する細かい血管群が部分的に拡張し、肛門内にいぼ状の腫れが生じたもので、一般に「いぼ痔」と呼ばれる。便秘や長時間同じ姿勢でいる等、肛門部に過度の圧迫をかけることが、痔核を生じる主な要因とされる。肛門の直腸に近い側に生じた痔核を内痔核と呼ぶ。通常、痛みを感じることはなく、自覚症状が少ないことが特徴である。排便時に、肛門から成長した痔核がはみ出る脱肛、出血等の症状が現れる。一方、肛門の出口側に生じた痔核を外痔核と呼ぶ。内痔核と異なり、排便と関係なく、出血や患部の痛みを生じる。

裂肛は、肛門の出口からやや内側の上皮に傷が生じた状態であり、一般に、「切れ痔」（又は「裂け痔」）と呼ばれる。裂肛は、便秘等により硬くなった糞便を排泄する際や、下痢の便に含まれる多量の水分が肛門の粘膜に浸透して炎症を起こしやすくなった状態で、勢いよく便が通過する際に粘膜が傷つけられることで生じる。

痔瘻は、肛門内部に存在する肛門腺窩と呼ばれる小さなくぼみに糞便の滓が溜まって炎症・化膿を生じた状態で、体力低下等により抵抗力が弱まっているときに起こりやすい。炎症・化膿が進行すると、肛門周囲の皮膚部分から膿が溢れ、その膿により周辺部の皮膚がかぶれ、赤く腫れて激痛を生じる。

痔は、肛門部に過度の負担をかけることやストレス等により生じる生活習慣病である。長時間座るのを避け、軽い運動によって血行を良くすることが痔の予防につながる。また、食物繊維の摂取を心がける等、便秘を避けることも痔の予防に効果的である。

一般用医薬品の痔疾用薬には、肛門部又は直腸内に適用する外用薬（外用痔疾用薬）と内服して使用する内用薬（内用痔疾用薬）がある。いずれもその使用と併せて、痔を生じた要因となっている生活習慣の改善等が図られることが重要である。

外用痔疾用薬は、痔核（いぼ痔）又は裂肛（切れ痔）による痛み、かゆみ、腫れ、出血等の緩和、患部の消毒を目的とする坐剤、軟膏剤（注入軟膏を含む。）又は外用液剤である。

内用痔疾用薬は、比較的緩和な抗炎症作用、血行改善作用を目的とする成分のほか、瀉下・整腸成分等が用いられ、効果が現れるまでにある程度の時間を要する。また、漢方処方製剤のように、痔になりやすい体質の改善を目的とするものもあり、外用薬と併せて用いると効果的なものである。

## 2) 代表的な配合成分等、主な副作用

## ● 外用痔疾用薬

外用痔疾用薬には、以下のような成分を組み合わせて配合されている。

外用痔疾用薬は局所に適用されるものであるが、坐剤、注入軟膏では、成分の一部が直腸粘膜から吸収されて循環血流中に入りやすく、全身的な影響を生じることがあるため、配合成分によっては注意を要する場合がある。

## (a) 局所麻酔成分

痔に伴う痛み・痒みを和らげることを目的として、リドカイン、塩酸リドカイン、アミノ安息香酸エチル、塩酸ジブカイン、塩酸プロカイン等の局所麻酔成分が用いられる。いずれも末梢の知覚神経の伝達を遮断する作用を示す。

リドカイン、塩酸リドカイン、アミノ安息香酸エチル又は塩酸ジブカインが配合された坐剤又は注入軟膏では、まれに重篤な副作用としてショック（アナフィラキシー）を生じることがある。

## (b) 鎮痒成分

## ① 抗ヒスタミン成分

痔に伴う痒みを和らげることを目的として、塩酸ジフェンヒドラミン、ジフェンヒドラミン、マレイン酸クロルフェニラミン等の抗ヒスタミン成分が配合されている場合がある。外用で用いられる抗ヒスタミン成分に関する出題については、X（皮膚に用いる薬）を参照して作成のこと。

塩酸ジフェンヒドラミン又はジフェンヒドラミンが配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、VII（アレルギー用薬）を参照して作成のこと。

## ② 局所刺激成分

局所への穏やかな刺激によって痒みを抑える効果を期待して、熱感を生じさせるクロタミトン、冷感を生じさせるカンフル、ハッカ油、メントール等が配合されている場合がある。

## (c) 抗炎症成分

## ① ステロイド性抗炎症成分

肛門部の炎症や痒みを和らげる成分として、酢酸ヒドロコルチゾン、酢酸プレドニゾン等のステロイド性抗炎症成分が配合されている場合がある。ステロイド性抗炎症成分に関する出題については、X（皮膚に用いる薬）を参照して作成のこと。

ステロイド性抗炎症成分が配合された坐剤、注入軟膏については、長期間に渡って使用されると患部の免疫機能が低下して、感染症や患部の化膿等を引き起こすおそれがあり、長期連用を避ける必要がある。また、患部が化膿している人では、使用を避ける必要がある。

② グリチルレチン酸、塩化リゾチーム

比較的緩和な抗炎症作用を示す成分として、グリチルレチン酸や塩化リゾチームが用いられる。グリチルレチン酸は、体内で分解されてグリチルリチン酸となって作用する。

グリチルレチン酸又は塩化リゾチームが配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、I-1（かぜ薬）を参照して作成のこと。

(d) 創傷治癒促進成分

アラントイン、アルミニウムクロロヒドロキシアラントイネート（別名アルクロキサ）は、組織修復作用を示し、痔疾患による肛門部の創傷の治癒を促進する効果を期待して配合されている場合がある。

(e) 止血成分

① アドレナリン作動成分

血管収縮作用による止血効果を期待して、塩酸テトラヒドロゾリン、塩酸メチルエフェドリン、塩酸エフェドリン、塩酸ナファゾリン等のアドレナリン作動成分が配合されていることがある。

塩酸メチルエフェドリンが配合された坐剤、注入軟膏については、交感神経系に対する刺激作用によって心臓血管系や肝臓でのエネルギー代謝等にも影響を生じることが考えられ、心臓病、高血圧、糖尿病又は甲状腺機能障害の診断を受けた人では、症状を悪化させるおそれがあり、使用する前にその適否につき、治療を行っている医師又は処方薬の調剤を行った薬剤師に相談がなされることが望ましい。高齢者では、心臓病や高血圧、糖尿病の基礎疾患がある場合が多く、また、一般的に心悸亢進や血圧上昇、血糖値上昇を招きやすいので、使用する前にその適否を十分考慮し、使用する場合にはそれらの初期症状等に常に留意する等、慎重な使用がなされる必要がある。

② 収斂保護止血成分

粘膜表面に不溶性の膜を形成することによる、粘膜の保護・止血を目的として、タンニン酸、酸化亜鉛、硫酸アルミニウムカリウム、卵黄油等が配合されている場合がある。

タンニン酸については、ロートエキス・タンニン坐剤や複方ロートエキス・タンニン軟膏のように、鎮痛鎮痙作用を示すロートエキスと組み合わせて用いられることもある。ロートエキスが配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、III-3（胃腸鎮痛鎮痙薬）を参照して作成のこと。

(f) 殺菌消毒成分

痔疾患に伴う局所の感染を防止することを目的として、塩酸クロルヘキシジン、塩化セチルピリジニウム、塩化ベンザルコニウム、塩化デカリニウム、イソプロピルメチルフェノール等の殺菌消毒成分が配合されている場合がある。

塩酸クロルヘキシジンの殺菌消毒作用に関する出題については、II-2（口腔咽喉薬、う

がい薬)を参照して作成のこと。

塩化セチルピリジニウム、塩化ベンザルコニウム、塩化デカリニウムの殺菌消毒作用に関する出題については、Ⅷ(鼻に用いる薬)を参照して作成のこと。

イソプロピルメチルフェノールの殺菌消毒作用に関する出題については、Ⅹ(皮膚に用いる薬)を参照して作成のこと。

(g) 生薬成分

① シコン

ムラサキ科に属するムラサキの根を用いた生薬で、新陳代謝促進、殺菌、抗炎症等の作用を期待して用いられる。

② セイヨウトチノキ種子

トチノキ科のセイヨウトチノキ(マロニエ)の種子を用いた生薬で、血行促進、抗炎症等の作用を期待して用いられる。

(h) その他: ビタミン成分

肛門周囲の末梢血管の血行を改善する作用を期待してビタミンE(酢酸トコフェロール)、傷の治りを促す作用を期待してビタミンA油等が配合されている場合がある。

● 内用痔疾用薬

内用痔疾用薬は、生薬成分を中心として、以下のような成分を組み合わせて配合されている。

(a) 生薬成分

生薬成分として、センナ(又はセンノシド)、ダイオウ、カンゾウ、トウキ、オウゴン、サイコ、ポタンピ、セイヨウトチノミ等が配合されている場合がある。

センナ(又はセンノシド)、ダイオウが配合された医薬品に共通する留意点に関する出題については、Ⅲ-2(腸の薬)を参照して作成のこと。

カンゾウが配合された医薬品に共通する留意点に関する出題については、Ⅱ-1(せき止め・痰を出しやすくする薬)を参照して作成のこと。

トウキに関する出題については、ⅩⅢ(滋養強壮保健薬)を参照して作成のこと。

① オウゴン

オウゴンは、シソ科のコガネバナの根を用いた生薬であり、消炎、解熱作用を示す。

② サイコ

セリ科のミシマサイコ又はその変種の根を用いた生薬で、中枢抑制作用、鎮痛、抗炎症等多様な薬理を持つことが知られ、精神神経用薬、痔疾用薬、滋養強壮保健薬等に配合される。

③ ポタンピ

ポタン科のポタンの根皮を用いた生薬で、鎮静、鎮痛作用を目的として用いられる。

## ④ セイヨウトチノミ

トチノキ科のセイヨウトチノキ（別名マロニエ）の種子を用いた生薬で、腫れ、炎症を抑える作用があるとされる。

## (b) 抗炎症成分

塩化リゾチーム、ブロメラインのような消炎作用を有する成分が配合されている場合がある。これら成分に関する出題については、I-1（かぜ薬）を参照して作成のこと。

## (c) 止血成分

毛細血管を強化し出血を抑える成分として、カルバゾクロムが配合されていることがある。

## (d) その他：ビタミン成分

肛門周囲の末梢血管の血行を促して、鬱血を改善する成分として、酢酸トコフェロール、コハク酸トコフェロール等が配合されることがある。

## ● 漢方処方製剤

乙字湯、芎帰膠艾湯のいずれも、構成生薬としてカンゾウを含む。カンゾウを含む医薬品に共通する留意点に関する出題については、II-1（咳止め・痰を出しやすくする薬）を参照して作成のこと。

また、いずれも比較的長期間（1ヶ月位）服用されることがあり、その場合に共通する留意点に関する出題については、XIV-1（漢方処方製剤）を参照して問題作成のこと。

## (a) 乙字湯

大便が硬くて便秘傾向がある人における、痔核（いぼ痔）、切れ痔、便秘の症状に適すとされるが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱く下痢しやすい人では、悪心・嘔吐、激しい腹痛を伴う下痢等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

通常、構成生薬としてダイオウを含み、その場合の留意点に関する出題については、III-2（腸の薬）を参照して作成のこと。

まれに重篤な副作用として、肝機能障害、間質性肺炎を生じることが知られている。

短期間の使用に限られるものでないが、切れ痔、便秘に用いる場合には、5～6日間服用して症状の改善がみられないときは、いったん使用を中止して専門家に相談がなされることが望ましい。

## (b) 芎帰膠艾湯

痔出血の症状に適すとされるが、胃腸が弱く下痢しやすい人では、胃部不快感、腹痛等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

## 3) 相互作用、受診勧奨

【相互作用】 外用痔疾薬のうち坐剤、注入軟膏については、成分の一部が直腸で吸収されて循

環血流中に入り、内服の場合と同様の影響を生じる。そのため、痔疾用薬の成分と同種の作用を有する成分を含む内服薬や医薬部外品、食品等が併用されると、効き目が強すぎたり、副作用が現れやすくなることがある。

内用痔疾用薬では生薬成分を主体とした製剤や漢方処方製剤が中心となるが、生薬製剤又は漢方処方製剤を使用する際に留意されるべき相互作用に関する一般的な事項について、XIV（漢方処方製剤・生薬製剤）を参照して問題作成のこと。

【受診勧奨】 一般の生活者においては、痔はその発症部位から恥ずかしい病気として認識されていることが多く、不確かな情報に基づく誤った処置がなされたり、放置して症状を悪化させてしまうことがある。

肛門部にはもともと多くの細菌が存在しているが、肛門の括約筋によって細菌の侵入を防ぎ、血流量も豊富なため、通常、感染症を生じることはない。しかし、痔の悪化等により細菌感染が起きると、異なる種類の細菌の混合感染によって起こり、膿瘍や痔瘻を生じて周囲の組織に重大なダメージをもたらすことがある。これらの治療には手術を要することもあり、すみやかに医療機関を受診し、専門医の診療を受ける必要がある。

痔の原因となる生活習慣の改善を図るとともに、一定期間、痔疾用薬を使用してもなお、排便時の出血、痛み、肛門周囲の痒み等の症状が続く場合には、肛門癌<sup>i</sup>などの重大な病気の症状である可能性も考えられ、早期に医療機関を受診して専門医の診療を受けることが望ましい。

## 2 その他の泌尿器用薬

### 1) 代表的な配合成分等、主な副作用

残尿感、尿量減少等の症状の改善を目的とする生薬成分として、以下のようなものがある。いずれも小児への適応はなく、また、摂取した成分の一部が乳汁に移行することが知られている。

#### (a) ウワウルシ

ツツジ科のクマコケモモの葉を用いた生薬で、尿路消毒の効果を示す。

#### (b) カゴソウ

シソ科のウツボグサの花穂を用いた生薬で、消炎、利尿作用を示す。

カゴソウのみを長期間連用すると胃を刺激するため、胃が弱い人が服用する際には注意が必要である。

#### (c) キササゲ

ノウゼンカズラ科のキササゲの果実を用いた生薬で、利尿作用を示す。一度に大量に服用すると、気分が悪くなるなどの副作用を示す。体を壊している人、妊婦は使用前に医師又は薬剤師に相談することとなっている。

<sup>i</sup> 肛門周囲に接している皮膚細胞又は肛門と直腸の境の粘膜上皮細胞が腫瘍化したもの

## (d) サンキライ

ユリ科のケナシサルトリイバラの根茎を用いた生薬で、利尿、解毒作用を示す。

## (e) ソウハクヒ

クワ科のマグワの根皮を用いた生薬で、利尿、消炎作用を示す。

## (f) モクツウ

アケビ科のモクツウの木質茎を用いた生薬で、利尿作用、消炎作用を示す。

## ● 漢方処方製剤

いずれも比較的長期間（1ヶ月位）使用されることがあり、その場合の留意点に関する出題については、XIV-1（漢方処方製剤）を参照して作成のこと。

## (a) 牛車腎気丸

疲れやすく、四肢が冷えやすく、尿量減少又は多尿で、ときに口渴がある人における、下肢痛、腰痛、しびれ、老人のかすみ目、<sup>かゆ</sup>痒み、排尿困難、頻尿、むくみの症状に適すとされているが、胃腸が弱く下痢しやすい人、のぼせが強く赤ら顔で体力の充実している人では、胃部不快感、腹痛、のぼせ、<sup>き</sup>動悸等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。また、4歳未満の小児には適用がない。

まれに重篤な副作用として、肝機能障害、間質性肺炎を生じることが知られている。

## (b) 八味地黄丸

疲れやすく、四肢が冷えやすく、尿量減少又は多尿で、ときに口渴がある人における、下肢痛、腰痛、しびれ、老人のかすみ目、<sup>かゆ</sup>痒み、排尿困難、頻尿、むくみの症状に適すとされているが、胃腸の弱い人、下痢しやすい人では使用を避ける必要があり、また、のぼせが強く赤ら顔で体力の充実している人では、のぼせ、<sup>き</sup>動悸等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

## (c) 六味丸

疲れやすく、尿量減少又は多尿で、ときに口渴がある人における、排尿困難、頻尿、むくみ、<sup>かゆ</sup>痒みの症状に適すとされているが、胃腸が弱く下痢しやすい人では、胃部不快感や腹痛等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

## (d) 猪苓湯

尿量が減少し、尿が出にくく、排尿痛あるいは残尿感がある人に適すとされている。

## (e) 竜胆瀉肝湯

比較的体力があり、下腹部の筋肉が緊張する傾向がある人における、排尿痛、残尿感、尿の濁り、こしけ（おりもの）の症状に適すとされているが、胃腸が弱く下痢しやすい人では、胃部不快感等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

構成生薬としてカンゾウを含む。カンゾウを含む医薬品に共通する留意点に関する出題に

については、Ⅱ－１（<sup>せき</sup>咳止め・<sup>たん</sup>痰を出しやすくする薬）を参照して作成のこと。

## 2) 相互作用、受診勧奨等

【相互作用】 生薬製剤又は漢方処方製剤を使用する際に留意されるべき相互作用に関する一般的な事項について、XIV（漢方処方製剤・生薬製剤）を参照して問題作成のこと。

【受診勧奨等】 残尿感や尿量減少は一時的な体調不良等によるもののほか、泌尿器系の疾患における自覚症状としても現れる。例えば、<sup>ぼうこう</sup>膀胱炎や前立腺肥大などによっても、これらの症状が起こりうることから、このような場合、一般用医薬品によって対処することは適当でない。

したがって、医薬品の販売等に従事する専門家においては、購入者等に対して、これらの一般用医薬品の使用は一時的なものに止め、症状が継続するようであれば医療機関を受診するよう促していくことが重要である。